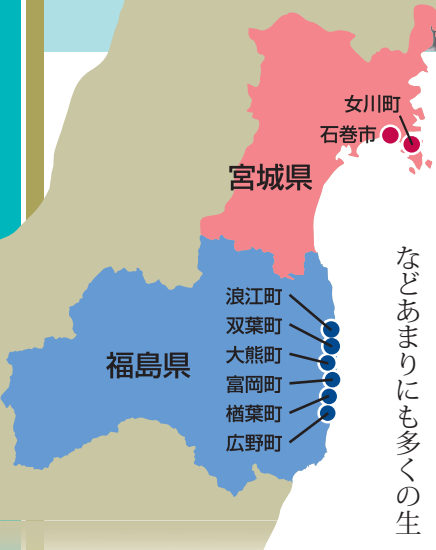


東日本大震災から1年を迎えて

～被災市町村からの首長の想い～

1万6,000人近くの尊い命が奪われ、約10万人の人々が故郷を追われて、日本中の人々が震えたあの日から1年。被災地域の皆様の復旧・復興に向けて尽力する姿は、多くの人々に感動と勇気を与えております。今回、その先頭に立って奮闘する首長の皆様方から、全国の電源地域に向けて、現在の「想い」を寄せていただきました。



宮城県

石巻市

亀山 紘市長



地の底から突き上げる経験したこともない大地の揺れ、その後、わがふるさとを一瞬で呑み込み、あらゆるものを破壊した見上げるばかりの巨大な津波。2011年3月11日、私達は自然災害の本当の怖さを目の当たりにし、「畏怖」という言葉をまさに実感いたしました。

そして、失ったものはかけがえない多くの市民の生命と、市民が祖先から受け継ぐとともに、これまで築き上げてきた資産や文化などあまりにも多くの生

活の礎であります。

しかし、その絶望とも思える環境の中、精一杯生き抜こうと汗を流し、手をつなぎ合う震災直後の市民の皆様が、私に復旧・復興に歩みだすための大きな力を与えてくれました。

さらに、被災した私たちに對して寄せられた国内外の皆様の温かい御支援、御声援、そして交通も途絶された中、臆することもなく熱い思いで被災地を訪れ、支えてくれた沢山のボランティアの皆様が温かい心の優しさは、私を含め多くの市民を励まし、勇気づけ、大きな希望を与えてくださいました。この場をお借りして、改めて心から感謝申し上げます。

これまで皆様から頂いたこの希望が、いま被災地に響く復興への槌音を響かせてくれたものと考えており、まさに人と人との「絆」が私たちを支えてくれたと信じております。

いま、私たちのふるさととは、東日本大震災により失われた産業、文化、地域社会の絆を再び取り戻し、以前にも増して快適で住みやすく、市民が夢や希望を実現できる新しいまちの創造、そして「母なる大地と海」とともに生きるまちづくりを目指し、歩み始めております。

その道程は長く険しいものと覚悟しておりますが、これまでに国内外の多くの皆様からつないでいただ

た「絆」を励みに、困難に屈せず、

一歩一歩、歩みを止めることなく前に進んでいくこと、そして、力強く復興していく姿をお示しすることが、被災地に生きる私たちの最大の恩返しであると考えております。

私も、震災から1年を迎え、ふるさと石巻の再生に向けて全精力を注いで尽力してまいりたいと、志を新たにし、決してあきらめることなく、復興にまい進していく所存でありますので、今後とも、温かな目で私たちを見守っていただくことをお願い申し上げます。

女川町

須田 善明町長



福島県の電源立地関係市町村の皆様におかれましては、地震・津波被害もさることながら東京電力福島第一原子力発電所にて発生した原子力災害のため未だ困難な避難生活を余儀なくされており、衷心よりお見舞いを申し上げます。

あの日から1年余りが過ぎ去りました。あの日、我が町は大地震と20m級の巨大津波により人口の約1割が犠牲になり、建築物の7割強が失われ、文字通り壊滅的な被害を受けました。営々と築き上げられてきた郷土の姿がたった1日で失われてきました。震災以降、当時の安住宣孝町長の強いリーダーシップのもと、被災者対応や道路啓開に始まり町の再建への取り組みが続けられてきました。また「まずは自分達自身が立ち上がらなければならぬのだ」と町民が自立的に団体等を組織し、郷土再建へ向けた努力を払ってきました。そのようにしてあの惨禍から今日まで歩んできたわけですが、その歩みは、これまで交流していただいていた他の電源立地地域をはじめとする、団体個人を問わず国内外のあらゆる方々から支えられたものであり、見知らぬ誰かの笑顔と幸せを願う世界中から捧げられた祈りとともにあった歩みでありました。それ無くしてはこの困難を乗り越えてくることはできなかつたでしょう。誌面をお借りし、皆様のご厚情に対し町民を代表し厚く御礼申し上げます。

今後本格的な復興局面に入っていくわけですが、我が町の復興に求められるのは震災からの再建ということに止まらず、復興プロセスを通じて東北をはじめとする地方の小都市が抱えてきた高齢化や過疎化などの様々な諸課題に対して答えとなるようなまちづくりを実現することにあると考えています。町域の大部分が被災した我が町において、今次復興は新都市建設とほぼ同義であり、これまでの我が町の良さと伝統を引き継ぎながら、次世代につなげられる復興を実現していかなくてはなりません。その姿を現実のものとし、か

福島県

浪江町

馬場有町長



2万1,000名の全町民が美しい郷を追われ、現在難儀な生活を強いられており、心が痛みます。

地震・津波の自然災害には人がどうしようとも免れることはできませんが、原子力事故は人がつくった発電所故に人が制御できるものであります。今回の事故調査委員会が中間答申

つてそこにあつたはずの笑顔と活力を取り戻していくこそが、犠牲になられた皆様が無念とお力添えを頂いた皆様のご厚情に報いる唯一の道であると信じます。

苦難と困難の道ですが、一丸となつて必ずや乗り越えていきます。皆様におかれましては倍旧のご理解とお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

で指摘しておるように、この事故は人災であり、対応がすべて後手に廻り、あげく事故情報、避難指示情報、スピーディー(SPEEDI)の情報等を公開しなかつたため、避難の方向を誤らせ、さらには、その対応手段をせまらざるに至りました。第一次・第二次避難への移動も当然遅れ、困難に困難を重ねる結果となりました。全国に散々に避難者が分散したことにより、生活支援をきめ細やかに行うことができない原因となっております。

もはや、こういう状況となつてしまった以上は、速やかに国家ビジョンを示し、復興戦略を具体的にスケジュール化し、生活再建の指針をつくるべきです。

この1年、全国からの見舞金並びに心あるおもてなしを受け「生きる力」をいただきました。皆様にあら

ためて感謝申しあげ、町再興のため一層のご協力、ご支援を賜りますようお願いいたします。

双葉町

井戸川克隆町長



昨年の東日本大震災並びに福島第一原子力発電所事故から早や1年が過ぎ、全国41都道府県に避難されている町民にとりましては、長引く避難生活で先の見えない将来への不安や、不自由で精神的ストレスを抱えながらの生活、依然として苦しい状況が続いております。

この1年が長かつたのか、短かつたのかと聞かれるとなんと応えてよいか迷います。町民がある程度我慢ができたのであれば短かつたと言えます。しかし、実態は我慢の限界を越えようとしている町民の思いに比べられない、もどかしく長く感じる1年でありました。過酷な生活、無責任な損害賠償、放射能の被ばく調査の遅れ、生きる意欲の減退などの

解消対策が未だに講じられていないのを無念に思っています。

現在、被災された町民の皆さんが、一番望んでいることは、ふるさと双葉町を元通りの安全な環境の町に復元のうえ返してもらい帰還することです。しかしながら、本町のエリアは放射線量の高いところが多く、避難区域の見直し案でも帰還困難区域であり、帰還する時期については明確な判断が示されない厳しい状況であります。

しかし、双葉町をなくすことではできませんし、させてはなりません。そのためにも帰還できるまでの間、子どもたちが学ぶ学校、若い人が働く職場、介護の必要な方を受け入れることができる介護施設、病院など、町民の皆さんが安全で安心して生活できる環境、さらに町民のコミュニティが維持され、本来の町の機能が確保されるところを準備しなければなりません。いわゆる「仮の町」であります。町民の皆さんと行政が力を合わせ前進することが大事であります。子どもたちの将来に希望が感じられ、子どもたちが主体のまちづくりを早急に進めてまいります。

これまで、全国の皆さまから励ましの言葉や多くのご支援を賜り厚く御礼を申し上げます。先の見えるまちづくりに取り組んでまいります。

おおくま 大熊町

わたなべ
渡辺 利綱 町長



東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所事故が発生してから早いもので1年が経過いたしました。町民は、今なお避難を余儀なくされ、会津若松市やいわき市を中心に、全国各地で避難生活を送っております。この間、立地市町村はもとより全国の皆様方から、心温まる励ましのお言葉や数々のご支援をいただきましたことに對しまして、心から御礼を申し上げます。

現在大熊町では、モデル事業として役場付近や線量の高い夫沢地区の除染作業が進められております。中間報告ではありますが、役場付近については約半分から3分の1に、夫沢地区も農地等については、表土を剥がす作業により線量が下がってきております。これらの結果をもとに町全体の除染計画を立て、出来るだけ早い時期に取り組み、町民が帰る環境を整えていきたいと考えております。

また、大熊町復興計画検討委員会を立ち上げ、町民の代表者と役場若手職員により復興計画の策定を進めております。「町民あつての町である」ということを念頭に、町民のニーズをきめ細かく把握し、3年先、5年先はどうなるのか、今後の大熊町の方向性を示し、町に戻らない方、戻れる状況になるまで線量の低い場所でも先の希望が見えるような計画を

策定したいと考えております。去る3月11日に、役場前庭に復興の願いを込めて「陽光桜」を植樹してまいりました。

復興への道のりは遠く、険しいものになりますが、満開の「陽光桜」の下に集える日を一日でも早く実現できるよう町が一丸となって取り組んでまいりますので、今後とも皆様のお力強いご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

とみおか 富岡町

えんどう
遠藤 勝也 町長



波により生命、財産が失われるとともにJR常磐線富岡駅、下水道処理場、漁港、道路など都市施設が流出しております。また、原発事故に伴い国内の広い地域に影響を与えており、国の対応や安全基準の甘さを露呈する結果となりました。

3・11の大震災及び原発の事故に際し、多くの皆様から心温まる支援物資、メッセージ、多くの義援金をいただき深く御礼申し上げます。

地震・津波においては、警戒区域内のため詳細な被害調査ができない状況のなか、家屋の倒壊や道路の陥没・寸断、下水道マンホールの液状化現象による被害が多数みられ、津

今回の災害において、町全体が避難する結果となり、全国の自治体や多くの皆様にお世話になりながら1年が過ぎましたが、国の対応に対し、いら立ちや失望を感じ、非常に悔やまれる1年でありました。2年目こそ、スピード感を持って進めてもらわなければなりません。町民は先が見えない不安を抱えながら生活の再建や町への帰還に向けて進もうとしておりますので、除染や復興に向けたインフラ整備、賠償問題、雇用の創出、健康管理等の問題を一つ一つ

具体的なことを示して町民に理解してもらわなければ前へは進めません。また、今後の課題として事故後の避難誘導、その後の避難者に対する対応を反省しながら、町の復興に向け多くの課題を超えて行かなければなりません。

そのためには、富岡町は無論のこと双葉郡が一丸となって帰還に向けて頑張つて参りますので、今後ともご支援とご理解を賜りますようお願い申し上げます。

榎葉町

草野孝町長



早いもので、大震災から1年が経ちます。

震災により犠牲になられた方、及び避難生活の中、亡くなられた方々に哀悼の意を表します。また、着の身着のまま避難を余儀なくされた町民の皆さまは、この間、筆舌に尽くせないほどのご労苦の連続であったことと思えます。心よりお見舞い申

し上げます。

昨年の3月11日・午後2時46分に発生した巨大地震により、榎葉町の状況は一変してしまいました。原発事故の影響を受け、町自体が町外に避難するという過去に例を見ない状況に見舞われました。警戒区域となつたが故に、立ち入りまでも制限され、榎葉町がどうなってしまうのか不安の中、とにかく事態がこれ以上悪化しないよう、原発事故の収束を願うばかりでありました。

その後、こうして、あの日から1年を迎えられましたのも、関係者の努力と、国内外の多くの皆さまからのご支援、並びに町民の皆さまの不屈の精神によるものと深く感銘を受けております。特に、多くの皆さまからのご支援に応えるためにも、この先、我々はしっかりと歩み続けなければなりません。強いと強く思うところがあります。町では、本年1月に「復興ビジョン」の策定を終え、これを骨格として復興に留まらず、災害をバネに、さらに発展することを目指し、「榎葉町復興計画」の取りまとめ作業を進めております。

我々には、未だ手つかずの上・下水道、道路などのインフラの復旧にはじまり、瓦礫処分、除染、津波被災地区の移転、教育、医療、雇用など、多くの課題が立ちはだかつておりますが、ふるさと榎葉町に人々の

日々の営みが復活することを信じております。そして、全国の皆さんから受けた多くのご支援に応えるためにも、困難な中から立ち上がる榎葉町の姿をご覧いただけるように進んでまいります。

広野町

山田基星町長



未曾有の被害をもたらした東日本大震災、そして行政機能移転、町民が避難生活を強いられた原発事故。振り返れば全ての面において、先の見えない中での対応に負われた1年であった。

そうしたなか、昨年9月に「広野町緊急時避難準備区域復旧計画」を策定し、インフラ復旧や除染モデル実証事業実施など、町民帰還に向けた事業を進めてきました。そして、本年3月1日からは行政機能を広野町に戻し、業務を再開しています。また、東日本大震災、原発事故からの復旧に終わることなく、町の復

興を目的とした「広野町復興計画(第一次)」を策定しました。この計画では、「誰もが安心して暮らせるまちづくり」など、4つの基本方針を掲げ、「町民一人ひとりの生活の復興」、「ふるさと広野町の復興」を目指し、復興に資する事業を展開したいと考えています。

本年3月末には、町が発令している避難指示を解除し、段階的な町民帰還を促したいと考えています。その前提として、公共施設はもとより民家の除染を徹底し、放射線に対する町民の不安を取り除くように努めます。さらには、生活関連インフラの再構築、基幹産業である農業の再生や雇用の確保などが不可欠であり、重点的な取り組みを行います。

当町は双葉郡の南の玄関口に位置し、現在、原発事故収束の最前線拠点としての役割を担っています。さらに、双葉地域の多くの広域行政機能や公益機能が失われている状況もあり、双葉地域の再生・復興に期待される当町の役割はさらに大きくなると考えており、これらに積極的に関わってまいります。

町の復旧・復興には、今後どれだけ時間を要するのかわかりませんが、行政のみならず町民の皆さまと共に、「元気で活力ある広野町」の実現に向け、一歩、一歩、歩みを進めていきたい。